YAMAYAMA ART CENTER IN PROGRESS

山山アートセンターをつくる

2022

YAMA YAMA ART CENTER

山山アートセンターは、

世界中の「山」をたよりに、

さまざまな人が力を持ち寄って

とにかく生きようとするプロジェクトです。

INDEX

02-03 **はじめに**
いつも心に山山を / イシワタマリ

04-07 **HISTORY**
山山アートセンターのあゆみ

08-09 **私にとっての山山アートセンター**
水田ウタコ

12-13 **山山な人びと 01**
田中亜衣子（一般社団法人豊岡コミュニティシネマ代表理事）
— みんなでつくる、みんなの豊劇

14-15 **山山な人びと 02**
吉岡ふなや吉兵衛（丹後で福祉とアートをつなぐ実行委員長）
— 福祉とアートを「まるっぽ」つなぐ

16-17 **山山な人びと 03**
みんなのサロン「ひまわり」
— 高齢になっても、病気をしても、今までどおりにできなくても。

20-23 **わたしのことAtoZワークショップ**

24 **おわりに**
そしてどこまでも / イシワタマリ

いつも心に山山を

イシワタマリ
（山山アートセンター代表・美術家）

イシワタマリ
1983年横浜市生まれ、京都府福知山市在住。20代の頃スペイン北部バスクやベルリンを拠点に創作活動を行ったのち、結婚を機に、アートがほぼ誰からも必要とされていない地域社会で子育て生活をすることに。2015年、「さまざまな人が力を持ち寄ってとにかく生きようとするプロジェクト、山山アートセンター」を立ち上げ。舞台は「このあたり」=京都府北部〜広く山陰地域。

自分にとって絶対に必要な「なにか」が、ほかの誰からも必要とされていないと感じたら?
絶対に必要な「なにか」というのは、人によってはタバコかもしれないし、七味唐辛子かもしれません。マニュキュアかもしれないし推しのアイドルの音楽かもしれません。私にとって、それはもっと言葉で説明のできない「なにか」でした。それを仮に「アート」と呼んではいたのですが、だんだんそうでもないような気がしてきていました。

絶対に必要な「なにか」が誰からも必要とされていない。そんな、私個人の悲鳴をきっかけに生まれ、いろんな人の暮らしの悲喜こもごもと出会いながら繰り広げられてきた、謎の七転八起の記録が「山山アートセンター」です。

初めは「山奥にアートセンターを作ればいいのかな?」という仮説に向かって歩いてみたんです。でもそうじゃなかった。次に「ひょうたん畑つきの高齢者福祉施設を作ればいいのかな?」という仮説に向かって歩いてみたのですが、それも違ったんです。仮説は仮説に終わったのですが、よくわからないなりにその方向に歩いてみたからこそわかったことがありました。

それは、「つくりたいのは施設や場所ではない」ということでした。

私がやりたいのは、いつだってそこにいる一人ひとりの人生に注目していたい、ということ。それはしいて言うなら、地域社会全体に「アート」の創造性と「福祉」の包容力をインストールさせることでした。

だから、「山山アートセンター」という名前の場所は、ないんです。
今までも、これからも、ないんです。

遠くに目をやるといつも壮大な山山の風景がありました。一人ひとり違う私たちをすべてありのままに包み込んでくれる山山。目を閉じて、自分の心の中にも山山の風景を思い描いてから目を開けてみれば、「存在しない」と思っていた「なにか」があちこちに散らばっていることに気づいたのです。

冊子『山山アートセンターをつくる』シリーズはこれで5冊目、最終回となります。かたちのない「なにか」へのおよそ10年間の歩みと、その歩みのなかで出会った、ここでは仮に「山山な人びと」とでも表現したいような素敵な人たちの存在に触れる1冊になればと思います。

HISTORY 山山アートセンターのあゆみ 2013→2022

2013

ひとりの主婦の悲鳴

結婚を機に福知山に移住し、“アート”など誰からも必要とされない地域社会で暮らすことになった美術家のイシワタマリがアイデンティティを失って絶望。しかし中心市街地でなくあえて山間部の三岳地区に引っ越したことで、地域住民たちの素敵さと山の絶景に感涙。“アート” だろうがなかろうが何か大切なことに気づきかけているような予感に突き動かされ、ありとあらゆるトライアンドエラーが始まる。

2015

絵本の世界の絵画教室

とにかく何かを始めるべく、中丹文化会館（綾部）の教室公募を見てイシワタを講師とする絵画教室をスタート。ユニークな人々が集い、のちに農家民 宿イワンの里（綾部）でのランチつきWSへと変化した（～2019）。綾部に移住2年目の水田ウタコ(→P08)は教室に参加したことをきっかけに山山展開のコアメンバーに。

「いろいろやってみる部」と「このあたりのしんぶん」。

とにかく仲間を作るべく、「お互いがやってみたいことにゆるやかに寄り添い合う地域の部活動」を発足、フリーペーパー「このあたりのしんぶん」を発行(～2019)。なお、ここでの「地域」「このあたり」とは京都府北部広域よりもさら に広く人それぞれに好きなだけ広く解釈してよいように設定されているのが特徴。普段はちょっと離れた他市で生活する、とてもおもしろげな人々とのつながりが生まれ始める。京丹後市網野のカフェでしんぶんを見た田中亜衣子(→P12)はのちに活動に関わることに。

やまやま休憩室

三岳地区の公民館の和室をとりあえず毎週開けておく活動。夕刻からは一品持ち寄りごはん会も。（～2016）

いろんなアーティストを呼びまくる

「アーティスト・イン・レジデンス」のかたちで国内外のアーティスト等を呼んできては大小さまざまな何か（ワークショップなど）を依頼。

ゲスト（～2019）：マヤ・シンジ・ジョン / ヤンチャ / アサダワタル / チェ・ミンキョン / 凡人ユニット（内田聖良+清水都花） / 磯島未来 / 笠間弥路 / プラシャン・ヴァルマ / スズキキヨシ / 山形歩 / 滝町昌寛 / 佐々井飛矢文 / 岡村淳 / 菅原直樹（OiBokkeShi） / 球体アイ / 井上和亨 ほか

2017

三岳ひょうたん畑との出会い

山山アートセンターを魅了してやまない三岳地区の高齢者たちがまだまだ現役だった 1990 年代、住民たちは皆ひょうたん栽培と加工で大盛り上がりしていたことを知る。よくわからない大切な何かがそこにあるような気がしてひょうたんのことを調べたり栽培したりしてみる。

ひたすらトークイベントをしまくる

とにかくいろんなゲストとイシワタマリの対談、鼎談を企画。

ゲスト（～2019）：小林瑠音 / 石神夏希 / 吉田雄一郎 / 塩見直紀 / 丸山桂 / 青木彬 / 伊藤なつこ / 朝重龍太 / 夏池風冴 / 池永梨乃 / にしかわしょう子 / 瀬尾夏美ほか

複合型福祉施設Ma・RooTsとの出会い

ひょうたんで楽器をつくるワークショップをきっかけに、宮津の福祉施設 Ma・Roots（マ・ルート / 社会福祉法人みねやま福祉会）と出会う。保育園 / 障害者通所施設 / 老人ホーム / 実習センターが一体となって開設したばかりの Ma・RooTsは、理念は素晴らしいが何かが圧倒的に足りない !! それはアートによって補いうる何かだ !! という仮説に突き動かされて門を叩いたイシワタマリは、のちに「Ma・RooTs 広報兼アートコーディネーター」として働くことになる（～現在）。

2018

山山こどもアート学校

こどもを対象にした不定期のアート教室をスタート。主催者自身の子育てとの両立が叶わず志なかばになった感があるものの、同じ子育て世代の人々との出会いがのちの財産に。

協力：笠間弥路ほか　会場：福知山公立大学食堂にじイロ食堂（福知山市）、シンマチサイトほか

三岳にて「よりあいみたけサロン」と「山の上のお寺でヨガ」

「やまやま休憩室（2015〜）」には地区住民がほぼ来ず、遠方からわざわざ訪れる人の出会いの場となっていたことから、地区の民生委員さんたちに相談して高齢住民向けにシフトしたサロンをスタート。　協力：新井厚子 / 古川絵美

同時期、三岳山麓の金光寺で四季折々の絶景に包まれながらヨガをする贅沢な企画もスタート。　講師：松尾圭子

2019

福祉とアートの“噛み合わない”トークシリーズ

福祉業界の人々との出会いをきっかけに、かねてより続けていたトークイベントがこんな題名に。「福祉」の枠を越えてみんなで生きることの意味を考えるシリーズ企画に。

ときに失礼なまでのぶっつけ対談がのちのいろいろなことの種まきに・・・。

ゲスト：アサダワタル / 櫛田啓 / 丸山桂 / 鈴木一郎太 / 稲穂涼平 / 奥山理子 / 猪狩 僚 / 平井万紀子 / 村松もも世 ほか

困ったときは専門家に相談する（公開イベントとして）

介護のこととか、文化芸術事業の会計のこととか、わからないことは専門家や経験者に教えてもらおう、というスタンスの公開イベント をいくつか実施。（〜2021）

ゲスト：稲岡錠二 / 松本泰子 / 松本健史 / 五藤真 / 森純平ほか

『イシワタマリを介護するときに読んでほしいAtoZ』

AtoZ 研究所の塩見直紀さんから「自分 AtoZ」の依頼を受けたイシワタは、考えたすえ『イシワタマリを介護するときに読んでほしいAtoZ』という切り口の冊子を発行。どうすればいろんな人にこのようなものを作ってもらえるのか? 試行錯誤が始まる。

2020

コロナ社会の到来! いろいろ企画倒れ&畑を耕す

準備していた「福祉とアートの“噛み合わない”合宿ツアー」や「注文をまちがえるリストランテを京都府北部で始めるための交流会」が企画倒れし、アーティスト・イン・レジデンス事業も非現実的なものに。ほかにやることもないのでこれを機に、後回しになりがちな畑作業に取り組むことに。

「山山よもやま相談室」

コロナ禍で社会が一変し、私もあなたもとにかく困ってる、何にどう困ってるのかもわからないくらい困ってる、とい うことで、アーティストを中心メンバーとするオンライン相談室を実施。

協力：笠間弥路 / 石神夏希 / タカハシタカ カーンセイジ / 守本陽一 / 蛇谷りえ / 犬飼沙絵 / 古川絵美 ほか

2021-22

「わたしのことAtoZワークショップ」

前述の『イシワタマリを介護するときに読んでほしいAtoZ』をどうすればいろんな人に作ってもらえるのか、試行錯誤のすえ辿り着いたワークショップ形式。このワークショップに山山アートセンターのすべてが凝縮されているような気がしている。→P20

講師：古川絵美 / 杉岡秀紀 / 蛇谷りえ　協力：三岳山天空の宿 / みんなのサロンひまわり→P16

私にとっての山山アートセンター

水田ウタコ（新聞社勤務）

2014年。大阪市内に暮らしていた我々ミズター家は、一念発起というか、勢い任せというか、とにかく深い信念とか特になく、ええい、ままよ！とこの北近畿の山の中の地に飛び込んだ。

この霧深い山間での暮らしは、都会での暮らしとはまったく毛色が違う刺激に満ち溢れていて、出会う人出会うモノ全てが新鮮に映った。楽しいこのあたりでの生活の中で足りないものがふたつだけあった。それは飲み屋とアートだった。

飲み屋についてはここではさておき、アート。暇さえあれば美術館やギャラリーに出向いたり、昼夜問わず行われるイベントにぱぱっと参加してぱぱっと帰れる大阪での生活から、「アートほぼゼロ」の生活になった。

そんな中、風の噂で耳にした「山山アートセンター」の存在。アートセンターってなに…？アートに飢えていた私は、実態がわからぬまま藁にもすがる思いで山山にコンタクトを取ってみた。確か中丹文化会館で開催していた「絵本の世界の絵画教室」だったように思う。

そこから山山の世界に興味をもち、徐々に魅了されていき、綾部・福知山界隈でのあれこれに顔を出したり、「このあたりのしんぶん」の制作も手伝ったりもした。往復書簡（と呼ぶにはラリーが続かなかったけど）もwebに連載させてもらったし、とある年末には、寒風吹きすさぶ中、長い間浸水し続けたひょうたんを出して磨いたりもした。このあたりに住んでるだけでは出会えない人や知りえない文化をいろいろと教えてもらったもんです。

その後、山山アートセンターは「福祉」の世界に足を踏み入れていった。アートの観点から福祉や介護についてリデザインする姿を遠くから見て、これこそがアートなのかと感動。絵を描いて作品を作ることだけがアートではなくて、生活や暮らしをよりよく、より新しい視点で作っていくこともアートなんやね。

マリちゃんの思い描いていた「山山アートセンター構想」は、着地点を探しながらふんわりランディングしているところなのでしょう。山山アートセンターイズムはこのあたりの面々の心の中に、うっすらと、しかし確実に根付いている。

水田ウタコ
1980年広島県福山市生まれ、京都府綾部市在住。京都と沖縄で大学時代を過ごし、大阪で10年暮らしたのち2014年綾部へ。現在は某新聞社に勤務しつつ裏日本広域のイベント情報をくまなくチェック、新しいお店ができればとにかく出没、おもしろそうなプロジェクトにはとにかくいっちょ噛みする3児の母。

山山な人びと

⑪ 田中亜衣子　一般社団法人豊岡コミュニティシネマ代表理事

みんなでつくる、みんなの豊劇

現在休館中のミニシアター「豊岡劇場」（以下豊劇／兵庫県豊岡市）を運営する「一般社団法人豊岡コミュニティシネマ」の代表を務める田中さん。もともとは現場パートスタッフとして働いていた豊劇がコロナ禍の打撃を受けて休館。1927年に芝居小屋として始まり大衆文化の拠点として愛されてきた豊劇を無くしてはいけない、映画を上映し続けたい、と夢中で立ち上がりました。コンセプトは「みんなでつくる、みんなの豊劇」。運営ボランティアや資金援助などあらゆるかたちで参画してくれるサポーター（個人または企業など）を幅広く募っています。

「“共に生きる”という精神が、山山アートセンターの影響をおもいっきり受けています。山山アプリをインストールして動いているという感じ」と田中さん。豊劇の歴史を知る高齢の方々への聞き書きをする「豊劇ストーリープロジェクト」や、おとなが子どもたちに映画鑑賞を贈るしくみ「U18 みらいチケット」にも力を入れています。

小さくとも長く映画館に火を灯し続ける、豊劇の新しいチャレンジ。たくさんのひとの関わりのなかで場が育っていくのが楽しみです。

田中亜衣子
1987年京都府京丹後市久美浜町生まれ・在住。3人の娘を育てつつ、「いろんなパートをするパートの達人、パートのたなか」（instagram：partnotanakasandayo）として現場スタッフをしていたミニシアター「豊劇」が休館。それを受けて一念発起、再開のために奮闘すべく「一般社団法人豊岡コミュニティシネマ」を立ち上げたばかり。現在、豊劇サポーターを絶賛募集中！toyogeki.jp

山山な人びと

⑵ 吉岡ふなや吉兵衛 丹後で福祉とアートをつなぐ実行委員長

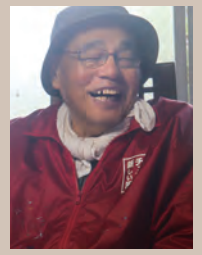
福祉とアートを「まるっぽ※」つなぐ

最後の久美浜町長、そして丹後で最後の舟大工。57歳で町が合併し政治家生活を終えたとき、「子どもの頃に好きだったことをやろう」と絵を描き始めました。そのあと障害者福祉施設の絵画指導を始めて12 年。「絵は人に見てもらって初めて心が宿るもの」と、自身の絵画作品と障害のある仲間たちや絵手紙教室の生徒たちの作品をいっしょに展示し続けています。このほど立ち上がった「丹後で福祉とアートをつなぐ実行委員会」では委員長を務める吉岡さん。多様なメンバーの視点で企画される『TANGOまるっぽ美術館』で、丹後全域に障害のある仲間たちの作品展示機会をつくり、ゆくゆくは作者の手にお金が入るしくみづくりができないかと模索します。高齢者施設等でのハーモニカ演奏にも尽力。「代々へんちょ（丹後の言葉で「音痴」）の家系だけど」と笑います。天気のいい日は畑仕事、雨が降ったら絵を描いて、疲れたら昼寝するのが日課。「畑と絵とハーモニカ。なんでも1本に絞ると挫折がくるもんだで、趣味は最低3つは必要やと思っとる」と吉岡さん。

「人生には登り坂と下り坂がある。若い頃はリュックにたくさん荷物を詰めて坂を登らにゃあかんし、楽な道と厳しい道があれば厳しい道を選んだ方がええ。わしは後期高齢者になったから、坂を降りながらひとつずつ荷物を下ろして身軽になってお迎えを待とうと思っとる」と語ります。「人生は人と人との出会いとつながり。ここへきてこんな（『TANGOまるっぽ美術館』の）出会いがあるとは思わなかった。これまでの人生経験と縁を活かせたらええなと思っとります」と吉岡さん。引き続き、幅広い方々のご協力を心よりお待ちしています！

※ まるっぽ＝丹後の言葉で「丸ごと」

『TANGOまるっぽ美術館』チラシ（左上）／吉岡さんの最新作（右上）／アトリエふなごやの裏はすぐ海（左下）／アトリエ前にて吉岡さん夫妻（左下）



吉岡ふなや吉兵衛

1947 年京都府京丹後市久美浜町生まれ・在住。元・舟大工。本名「吉岡光義」として久美浜町最後の町長を務めた。現在、委員長を務める「丹後で福祉とアートをつなぐ実行委員会」は、アートを通して多様性や共生社会について考えるプロジェクト『CONNECT⇄_:つながる・つづく・ひろがる』の府域展開事業『CONNECT−EXPAND』展（2021年京都府主催）の丹後エリア（宮津会場）で出会った顔ぶれで『TANGOまるっぽ美術館』を発足したばかり。

山山な人びと

⑬ みんなのサロン「ひまわり」

高齢になっても、病気をしても、
今までどおりにできなくても。

この秋にできたてのホヤホヤ、みんなのサロン「ひまわり」。現役看護師のメンバーによる検温と血圧測定からはじまり、ゲームや体操で盛り上がってからみんなでお昼ごはん。午後はピアニカの伴奏で高らかに歌い、コーヒータイムを終えて帰路に着きます。「同じ地区で長年生活してきた人たちだから、準備しながら懐かしい話ができるのも楽しい」と話す 60〜70歳代の世話役メンバーと、「若い方々にほんとに楽しませてもらってます」とニコニコ笑顔の80〜90歳代の「利用者」たち。「歌いたい曲ある?」とリクエストを聞きながら、歌詞があやふやでもジャンケンを間違えても、とにかくみんなで大笑い。世話役はおせっかいでパワフルな女性たちが中心ですが、それを淡々とサポートする穏やかな笑顔の紳士たちの姿も。男性がいてくれることでほかの男性も顔を見せやすくなります。

「いわゆる“高齢者サロン”は元気な人しか来られず、年齢を重ねたり病気や怪我をした人は参加を躊躇してしまう。むしろほんとうに居場所を必要としているはずのその人たちのための場所をつくりたいとずっと考えていた」という代表の佐中妙子さん。「だって、ゆくゆくは自分たちも通る道だもん。そのときの土台作りになれば」とメンバー同士で笑います。

スタートしたばかりの現在、世話役メンバーの練習をかねて当面は月2回×3名ずつ「利用者」を受け入れていく計画。「自分たちの手の回る範囲で楽しくやりたいから、なかなか規模を広げることはできないと思います。だから、こういう小さな場所がいろんな地域に増えたら嬉しいですね」と希望を話してくれました。

みんなのサロン「ひまわり」
民生委員や老人会役員、介護や医療の現場経験をもつ60〜70歳代の男女が集結。京都府福知山市野花地区の空き家を活用してスタートしたばかりのサロン。高齢者の居場所として月2回サロンを運営しているほか、読書好きのメンバーによる文庫も計画中。子どもや若い人にも立ち寄ってもらえるような場所になればと話す。

わたしのことAtoZ

ワークショップのお知らせ

ワークショップ開催、個別インタビュー、
冊子作成のご相談に応じます。
個別にお問い合わせください。

お問い合わせ
080-3939-2846（イシワタ）
yamayama.art@gmail.com
yamayama.art.center

人生、山あり谷あり。

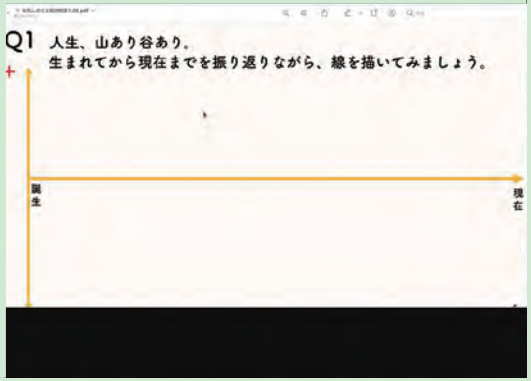
「わたしのことAtoZワークショップ」では、

一期一会と気軽なおしゃべりを通じて、

それぞれの「これまで〜今〜これから」を整理し、

出てきたキーワードを

A〜Zの26の頭文字にまとめます。



わたしのことAtoZ ワークショップを終えて

「人生100年時代」と言われて久しくなりました。退職したあとの人生の過ごしかたをデザインしようにも、毎日忙しくてなかなか振り返る機会がない。そんなとき、この「わたしのことAtoZ」は、たった一日ではできないけれども、いいことも悪いことも酸いも甘いも含めて人生を振り返るツールになるでしょう。人に語ったり引き出してもらったりしながら、自分の人生を振り返る。こうした機会をあえて作ることの大切さを感じています。
つながりが寿命を延ばしてくれるという研究もたくさん出ています。寿命の「寿」の字は「どれだけ生きたか」、長さだけでなくどういうふうに生きたかという質の部分を意味するそうです。自分の父は51歳で亡くなったのですが、短くとも濃く生き抜いた。注目しなきゃいけないのはそのことのほうなのだと、改めて学んでいます。

——杉岡秀紀（福知山公立大学准教授）

頭でぼんやりと自分のことがわかっているつもりでも、いざ言葉にしようとすると意外と難しいものです。
だからこそ、自分でわかっているつもりのことを、あえて紙に書いたり、口に出して初めましてのひとや知り合いと共有する作業を通して、自分の価値観が少しずつ明確になるのではないかと思います。
AからZを埋めていく作業の中で出るキーワードはひとりひとりの人生を創り上げてきたものです。その中に自分にとって大切なもの、自分を豊かにしてくれるひと・もの・ことが入ってます。この先、人生で何か大きな出来事があるたびに「わたしのことAtoZ」を眺めたり、家族や関わる方々と共有してみてください。自分らしく生きるヒントが散りばめられていると思います。

——古川絵美（作業療法士）

話を聞いているといろんな人生にたくさん触れた。初めて会った数名の人たちにそれぞれのドラマがあって、朝ドラをダイジェストで見ている気分になる。
「自分のこと」を書き留めるにはおしゃべりがないと思い出せないそうで、このワークショップはおしゃべりが必須だった。ガンで亡くなった家族のこと、仕事のこと、故郷のことをあっけらかんと話してくれるが、今日初めて会う私が聞いてしまっていいのか、時折戸惑った。私にもそういう時がいつか来るのかと想像してみる。私のことを何にも知らない人に、こんな風に明るくおしゃべりできるだろうか。心を閉ざして介護されるまま過ごすのだろうか。このワークショップはそんな、いつか来るべき日の私が孤立しないために、いろんな人とおしゃべりするための実践のようにも思える。
これからもたくさん回を重ねることで「自分のこと」を話せる場が生まれ、聞く側も「受け」を鍛えたり、文集みたいに集まった言葉をアーカイブできたら、友達同士の井戸端会議とは別の、山山アートセンターの目指す「もう一つの福祉」がつくられるかもしれない。

——蛇谷りえ（うかぶLLC代表）

そしてどこまでも

「山山アートセンター」という名前の場所はありません。これは、人の暮らしの悲喜こもごもと共に繰り広げられてきた、謎の七転八起の記録です。

たくさんのたくさんの人・場所・ものごととの出会いと、民間や行政からのいろいろな助成制度※があったからこそ繰り広げることができました。試行錯誤を受け止めていただける環境がなければ決して見ることのできない数々の景色を見ました。ここには到底お名前を挙げきれないたくさんの方々のお顔が浮かび、感謝の気持ちでいっぱいです。

・・・と、なんだかありきたりな感傷にふけってしまいました。

人間は一人ひとり違う。一人ひとり違う人間たちがただそれぞれに生きていて、そうやって地域社会がそこにある。その事実が何よりも尊い、と、思っています。

—— イシワタマリ（山山アートセンター代表・美術家）

山山アートセンターをつくる2022

発行日	2022年12月20日
編集	イシワタマリ、水田ウタコ
写真提供	イシワタマリ、水田ウタコ、丸山桂
発行者	山山アートセンター

※この冊子は、京都府の助成（令和4年度地域交響プロジェクト交付金）を得て作成されました。山山アートセンターの取り組みにはこれまでに、アサヒグループ芸術文化財団（2015-2016）/ 福知山市（2015-2016）/ 福知山公立大学北近畿地域連携機構（2021）/ 京都府（2017-2020, 2022）の助成金が活用されています。